

コロナ時代の 資金繰り改善 セミナー

[第8回]

融資を受けやすい タイミング

今後しばらくは、コロナと上手に付き合いつつ銀行交渉を行なう必要があります。その際の、資金繰りをよくするための心構えを理解しておきましょう。

モロトメジョー税理士事務所
税理士 諸 留 誕

【第7回】… スムーズに融資を受けるために必要な書類

【第8回】… 融資を受けやすいタイミング

【第9回】… 銀行に必ず聞かれる「資金使途」の種類

【第10回】… 借りておしまいにならない、借りてからやるべきこと

【第11回】… 黒字のときこそ会社がやるべき銀行対応

【第12回】… 銀行の「事業性評価」に応える会社は融資に強い

銀行融資には、借りやすいタイミングもあれば、借りにくいタイミングもあります。
スムーズに融資が受けられるように、「借りやすいタイミング」を押さえておきましょう。

タイミング① 黒字のとき

黒字、つまり、利益が出ているときは融資を受けるベストタイミングです。

そんなことは知っている、と思われるかもしれませんが、「知っている」と「実践している」の

とでは別の話です。

実際に、多くの会社が、赤字になつてから慌てて融資を受けようとしませんが、黒字のときには「いまは大丈夫」と言つて、融資を受けようとはしません。

ではなぜ、黒字のときは融資を受けやすいのか。それは、銀行から「貸したおカネを返済してもらえぬ会社だ」と見られるからです。貸したおカネの返済原資は利益です。利益が出てはじめて返済できる、これが銀行の考え方になります。

逆に、赤字の場合。利益がない

わけですから、1円たりとも返済できないと見られることになり、返済できないとわかつている会社におカネを貸す理由はありません。

言われてみれば当たり前の話ではありますが、黒字のときにはついつい、「大丈夫だ」と考えてしまいがちです。

いずれ赤字になるかもしれない、という将来までイメージして、黒字のときにこそ融資を受けるようにしましょう。

タイミング② おカネがあるとき

おカネがあるとき、つまり、会社に対応の現金預金があるときは、融資を受けるのによいタイミングです。

なぜなら、おカネがあれば返済が滞ることが少なくなるからです。少々の赤字があつたとしても、おカネがあれば、しばらくのあいだは返済できます。ゆえに、現金預金がある会社に対して、銀行は安心して融資をすることができると考えられます。

逆におカネがない会社はどうかというと、何かの拍子におカネが足りなくなり、返済が滞ることも

あり得ます。「黒字倒産」の言葉もあるように、たとえ利益が出ていてもおカネが回らなくなることもあります。

これもまた、当たり前の話ではあります。実際にはおカネがあると、やはり「大丈夫だ」と考えてしまいがちです。

会社経営はよいときばかりではありません。売上が減ったり利益が減ったりして、おカネがなくなることもあるでしょう。そのときになって、借りようとするのでは遅いのです。

こんなとき、銀行は融資をしたがらない、ということは覚えておきましょう。

具体的には、現金預金の残高が平均月商（年間売上高÷12か月）の1か月分未満になると融資が受けにくくなります。自転車操業の危険な会社だと銀行に見られてしまうからです。

タイミング③ 決算書ができたとき

銀行が会社に対して融資をするかしないかの判断材料はいろいろあります。なかでも、圧倒的に大きなウェイトを占めるのが決算書です。決算書の内容次第で融資の

可否はほぼ決まる、と言ってもよいでしょう。

ところが、決算日から数か月ほど経ってから融資を申し込むと、銀行からは「試算表も見せてほしい」と言われます。これは、決算日から現在までの状況を確認するためです。

試算表を求められた会社としては面倒でしょう。試算表は当たり前につくるべきものとは言っても、やはり試算表をつくるのは大変だからです。

また、決算日以降に業績が悪くなってしまう会社はどうでしょう。いくら決算書重視とは言っても、現在の業績が悪ければ、銀行は融資しにくくなります。

会社の業績は、いつ悪くなるかわからないのですから、黒字の会社はとくに、決算書ができたタイミングで融資を申し込むのがよい

融資を受けやすいタイミング

- ① 黒字のとき
- ② おカネがあるとき
- ③ 決算書ができたとき
- ④ 銀行から勧められたとき
- ⑤ 返済が進んだとき

でしょう。

このときのポイントは、「借入の計画」を伝えることです。

次の決算までの1年間に、「いつごろ、どういう使いみちで、どれくらいの金額」の融資を受けたか、を伝えます。

これによって、銀行からは「計画的な会社だ」と評価されます。一方、場当たりに融資を受けようとする会社に対しては、銀行は不安を感じるものです。

タイミング④ 銀行から勧められたとき

銀行から勧められたとき、つまり、銀行から「融資を受けませんか?」と言われたときは、融資を受けるのによいタイミングです。言うまでもなく、銀行は「貸したい」と思っているから融資を勧めているのであり、会社は融資を受けやすくなります。では、銀行はいつ「貸したい」と考えるのか。銀行の本決算である3月か、中間決算である9月です。

決算のときには業績を上げておきたい、融資残高を増やしておきたい。銀行にはノルマもありますから、決算に向けて「貸したい」との思いはいっそう強くなりま

す。誤解を恐れずに言えば、融資審査は緩くなるところです。普段であれば融資を受けるのが難しい状況でも、受けられる可能性が高まります。

したがって、今後の業績に自信が持てないような会社であれば、勧められたら積極的に借りることを検討しましょう。

また、借金を嫌い、銀行から融資を勧められても「いまは要らない」と断ってしまう会社もあります。しかし、会社を続けていると、いつおカネが必要になるかはわかりません。実際、新型コロナウイルスの影響で、多くの会社が突然おカネを必要とする事態になりました。不測の事態も想定して、借りられるときに借りておく、借りやすいときに借りておくことも考えておきましょう。のちのち会社を守るにつながります。

タイミング⑤ 返済が進んだとき

返済が進んだときは、融資を受けるのによいタイミングです。たとえば、当初300万円の融資を受けたのち、100万円くらい返済をして、借入残高が200万円くらいになっているとき。このよ

うなタイミングであれば、当初の300万円まで、つまり返済が済んだ100万円くらいの融資は受けやすいと言えます。

なぜなら、銀行としては「300万円まで貸した」という実績があるからです。

業績が大きく悪化しているような場合は別として、状況に変わりがなければ「一度貸した金額までなら大丈夫だろう」と銀行は考えます。とはいえ、返済があまり進んでいない状況だと融資に応じてもらいにくく、「おおむね3分の1くらい返済したとき」がひとつの目安です。このように、元々の融資金額まで借り直す融資を「折り返し融資」と呼びます。

借りたらあとは返すだけ、という会社は少なくありません。借金を早く返したい気持ちはわかりますが、それだと手元のおカネはほとんど少なくなってしまいます。定期的に折り返し融資を受けて、手元のおカネを減らさないようにすることも考えておきましょう。このとき、折り返しによって借金が増えたとしても、同じだけのおカネもまた増えているのですから、実質的には借金がないのと同じと言えます。